

登熟条件が良好であれば、穂数を650本/㎡まで増加させれば増収します。しかしそれ以上穂数を増加させても製品収量は増加しません。一方、登熟不良条件では550本/㎡から穂数を増やしても製品収量は増加しません。そのため、収量・品質の年次変動を小さくするためには、穂数550～650本/㎡を目標として幼形期重点の追肥を行うことが有効です（図3）。

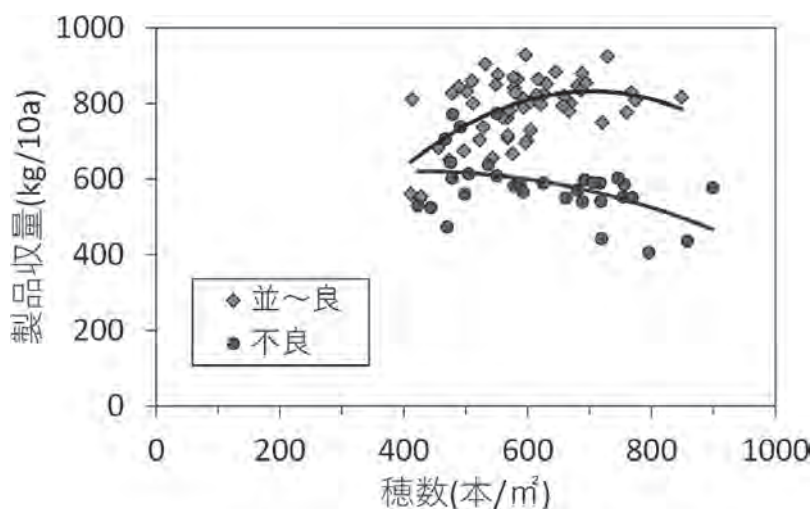
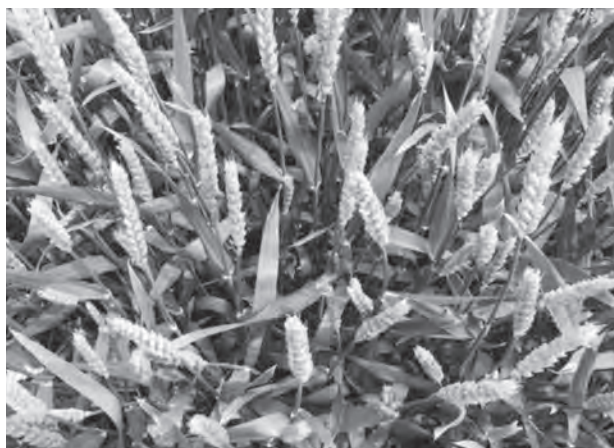


図3 登熟良否による穂数と製品収量の関係



これまでの目標（穂数700本/㎡）



安定生産に向けた目標（穂数550本/㎡）

3. 留意点

- (1) 本成績は「きたほなみ」の気象による収量・品質の年次変動緩和に向けた対応技術としてご活用ください。
- (2) 本成果は適正播種量・適期播種に基づいています。薄播・遅播は減収リスクがあります。
- (3) 本成果を反映した施肥ツールを道総研ウェブページで公開予定です。

<https://www.hro.or.jp/list/agricultural/index.html>

（成績名： 秋まき小麦「きたほなみ」の気象変動に対応した施肥管理）

もう少し詳しい情報はこちら

検索は、「農業技術情報広場、一般課題R 1」で



本技術内容についての問い合わせ先

道総研十勝農業試験場

電話（0155）62-2431

E-mail: tokachi-agri@hro.or.jp